

最大のチャレンジ

八南小・4

伊藤 諒人

「諒人ナイスシュート。」

雨の中、すべて転びながらも右足のインサイドでつけたシュートが決まった。この遠せいで、チームで取った初めてのとく点が、ぼくのゴールだった。この静岡遠せいに集まったチームは、どのチームもぼくたちのチームより強かった。いちばん最後にこのチームに入ったぼくは、チームの中でも今までなかなかゴールを決めることができなかった。この遠せいで、ぜつ対決めてやると思っていた。雨で上手く走れなかったけど、仲間から前の方に速いパスが来たので、ぜつ対追いついてやると思って全速力で走った。右足の内がわになんとか当たってゴールにすいこまれた。

「よっしゃー。」

うれしくて仲間にタッチした。今まで自信がなかったぼくに、少し自信がついた試合になった。

この静岡遠せいは、ぼくにとって初めてのけい験だった。今まで家族とはなれて一ぱくはしたことがあったけど、二ぱくは初めてだった。二ヶ月くらい前、遠せいの話を聞いて行きたくないと思った。でも、まだまだ先のことだったから、だいじょうぶだと思っていた。カレンダーが八月一日になり、いよいよ遠せいの八月九日が目に入った。このときから、毎日、九日になるのをカウントダウンした。毎日夜ねるときに、一人でねるのこわいな、と不安なことばかり考

えていた。

遠せいに行く前の日の夜、こわいことしか考えられなかった。不安でいっぱいだったぼくは、泣かないようにがまんしていたけれど、とうとう泣いてしまった。

「こわいよ。行きたくない。明日行くのやめたい。お母さんいい？」

と、お母さんに聞いてみた。お母さんは

「だいじょうぶだつて。夜ねれなかったら、おいしいものたくさん食べてるときのこととか、グランパスの試合を見に行った楽しいことを考えれば、ねられるで。」

と言った。お母さんはそう言ってくれるけどそんなの無理と思った。

「きんちようしたときは、思い切り泣いていいんだよ。」

と、お母さんが言ってくれた。お母さんがやさしくギュウしてくれるから、もっともっと泣けてきた。九時にねるつもりが、十時半くらいまで、ずっと泣いていた。泣きすぎて、頭ががんがんした。

「いっぱい泣いたから明日は泣かないよ。」

と、お母さんにせん言した。泣くのにつかれて、知らないうちにねてしまった。

当日、きんちようのせいか、いつもより早く起きてしまった。もうやだ、朝になっちゃった。やだやだ、行きたくない。お母さんが「おはよう。」

と言ってくれたので、泣かないと決めていたのに、ふとんの中でなみだが止まらなかった。いつもはすぐに、い動着に着がえられるのに、今日は着るのがいやで、お母さんが着せてくれた。お母さんのやさしさで、もっと泣けてきてしまった。お母さんが作ってくれた

おにぎりは、食べたかったけど、さみしくて悲しくてほとんど食べられなかった。

家を出ると七時になった。

「泣けちゃうから、お母さんは送らなくていいからね。」

と、前の日に伝えたから、お父さんが送ってくれた。車に乗り、お母さんとギューをした。お母さんはにこにこして手をふってくれた。ぼくは、なみだが止まらなくて、手をふるのがせいっぱいだった。

集合場所に行くまで泣いてしまったけど、チームのみんなが見えたら、泣いているのがはずかしくなって、泣くのをやめた。

ついに遠せいが始まった。試合ではゴールを決めることができた。宿に着くと、建て物は少し古かったけど、みんなでウノやトランプをしていたら、思っていたより楽しかった。いちばん不安だったねる時間も、家族とはなれてさみしかったけど、つかれていたからいつの間にかねていた。

初めての二はく三日の遠せい、お母さんがいなくて不安だったけれど、なんとか終わった。正直、もう行きたくないけど、この遠せいを通して、不安なことにもちようせんすれば、なんとかなることが分かった。

この遠せいは、ぼくにとって最大のチャレンジになった。ぼくの次のチャレンジは、リフティングを連続二十回やることだ。苦手なことを後回しにしてしまうことが多いけど、リフティングの練習も、やればできると思っちょうせんしたい。これからも、不安なことや苦手なことにもチャレンジできる人になりたい。